

私は自分の肩書を「文筆家」と名乗ります。分不相応に「作家」と呼んでいただくこともありま

すが、自分には「文筆家」という呼び名が一番しっくりきます。というのも、オリジナリティのほかに、さまざまなジャンルの仕事をしているからで、その中でも一番多いのが「ノベライズ小説」といわれるものです。

一般には馴染みのないジャンルかもしれませんが、映画やテレビドラマ、漫画などを小説化、つまり「ノベライズ」した作品のことです。ご存知のように、映画やドラマには、セリフと簡単なト書きだけの脚本があります。これを、ストーリーを膨らませながら、時には創作を加えて小説に仕立てていくのです。

このノベライズ小説を説明する時、私は自分のことを「ノベライズ作家」ではなく、「ノベライズ職人」です、と申し上げます。脚本という、いわば建物の設計図があって、私の仕事はそれを建てていく大工さんのようなものだと思います。ノコギリやトンカチがペンであり、釘や建材が日本語です。

けれど、ただ建物を建てれば良いというわけではありません。設計図にも、洋館、日本家屋、マンション、お城……いろいろあるように、作品が違えば、文章や言葉も、その内容や読者層に応じて書き分けます。大河ドラマのような歴史物、現代が舞台のラブストーリー、老夫婦の晩年を描いた物語、高校生の群像アニメーション、子供向けのお伽話……それぞれの作品によって言葉を選び、文章を磨き上げていくのです。歴史物に現代人が使うような言葉は使いませんし、読者層がシルバード世代なら、取って置けない流行語や古い言葉を意識して使います。若者世代であれば流行語を多用した軽い文体で書くこともありますし、子供が読む本ならわかりやすく、リズム感のある文章にします。

そんな仕事をしている中で、日本語がとくに素晴らしいと感じるのは、作中で喜怒哀楽や、その動作を表現する時です。

たとえば脚本に「○○が笑った」という一文があったとしても、それが「腹を抱えて笑った」のか、「ほくそ笑んだ」のか、「吹き出した」のか、その場面にふさわしい表現を探して書くわけですが、日本語には実にたくさん同義語があります。思いつくままにあげてみても、「含み笑います」「嘲笑する」「微笑む」「冷笑する」「薄笑する」「破顔する」「二笑する」「頬を緩める」「顔をほころばせる」「苦笑する」「作り笑する」「クスクス笑う」「ヘラヘラ笑う」……枚挙

TPOに合わせた日本語を話し、書くことができるベースが大切

～ 文筆家 豊田美加氏が語る日本語の魅力 ～



豊田美加 とよだ・みか

文筆家。成蹊大学文学部卒。
ノベライズ作品に『SPEC』シリーズ、朝の連続テレビ小説『ごちそうさん』、『海難 1890』など。オリジナリティ小説に『病名のない診察室』『台南の空ゆかばーボクとうさぎのマンゴーデイズー』ほか、漫画原作なども手掛ける。



私にとって、日本語は最高の遊び道具でもあります。背筋の伸びる敬語、面白い方言、奥ゆかしい古語、舌を噛むようなカタカナ語、日本の風土や文化が詰まった季語。裾野が広く、懐の深い日本語は、年齢を問わずに遊べる退屈しない遊具です。これからも大好きな日本語を勉強し、生涯を通して遊び尽したいと思っています。

私たちが使わなくなった言葉もよくご存知で、その豊富な語彙力に驚かされることしばしばありました。と同時に日本人として、とくに日本語を生業の手段にしている身として、自分たちの歴史ある母国語をもっと大事にしなければ……と身の引き締まる思いでした。

私は、言葉は生きていっていると思っています。造語や省略言葉を否定することはしません。作品によっては、わざと使うこともあります。けれどもそれは、TPOに合った日本語を話し、書くことができるというベースがあるからです。良質の木材を選び、ノコギリを正しく扱うことができるからです。いたずらにチェーンソーを振り回すような、危うい日本語の使い方をしないよう、常に心がけています。

話が変わりますが、この数年、台湾の日本語世代と呼ばれるご老人方にお目にかかる機会が何度かありました。台湾は終戦まで日本が統治していたため、八十歳前後から上の方々は、だいたい今でも日本語を話すことができます。これが乱れない、まるで清流を見るような、とても美しい日本語なのです。私たちが使わなくなった言葉もよくご存知で、その豊富な語彙力に驚かされることしばしばありました。と同時に日本人として、とくに日本語を生業の手段にしている身として、自分たちの歴史ある母国語をもっと大事にしなければ……と身の引き締まる思いでした。

に暇がありません。また、「ニヤリとする」「にたいたする」「にんまりする」など、似ている表現でも微妙にニュアンスが違います。こういった語彙の柔軟さ豊かさに、私は本を書くたび感動します。ひらがな、カタカナ、漢字を持つ日本語だからこそ、繊細な日本人の感性で育まれた日本語だからこそです。